第36回　北海道建築賞・北海道建築奨励賞　審査経緯

今年度の北海道建築賞委員会は、委員の2名が交代し、新主査が選任され新しい体制で、2011年5月6日、札幌市内で 2011年度の第1回委員会を開催した。委員会体制、審査プロセスの透明性、スケジュールなどを確認したうえで応募状況を検討し、委員の中で注目に値する 作品を「北海道建築作品発表会」他をもとに議論し、その中から委員からの応募推薦対象作品として5作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。

第1回の審査委員会は、5月19日に開催され、応募作品が7点に前述の5作品を加えた計12作品を今年度の審査対象作品とした。

応募作品及び応募設計者（応募順）：

1 フツウ・ノイエ（赤坂真一郎君／㈱アカサカシンイチロウアトリエ）

2 北海道整形外科記念病院（弓良芳雄君他／㈱北海道日建設計）

3 第一三共札幌支店ビル（今井宏君／清水建設㈱設計本部）

4 旭川の家（加瀬谷章紀君他／国際ローヤル建築設計一級建築士事務所）

5 小樽市指定歴史的建造物（旧）岡川薬局

（福島慶介君／N合同会社・㈱福島工務店）

6 千歳市防災学習交流センター（そなえーる）

（藤原末夫君他／㈱久米設計札幌支社）

7 十勝トテッポ工房（鈴木理君／㈱鈴木理アトリエ）

8 札幌市立大学大学院デザイン研究科棟

（那須聖君／札幌市立大学、辻弘明君他／創建社）

9 下川町環境共生モデル住宅　美桑（櫻井百子君他／アトリエmomo）

⑩岩見沢の家（長坂大君／京都工芸繊維大学）

⑪Leaf house（小倉寛征君／エスエーデザインオフィス）

⑫美幌の家（堀尾浩君／堀尾浩建築設計事務所）

審査には、議論を通じて全委員の同意を得ること、評価の視点としては、これまでの選考の視点を崩さずに、計画理論や設計・デザインに対しての新しい挑戦 や問題意識、新しい生活・環境の構築を目指した意欲とビジョンに対する「先進性」、時間空間軸における自然を含めた人間社会に対する「規範性」、それらを 統合して建築としての高い質を確保することを目指す

「洗練度」の 3 項目を共通価値とすることを最初に確認し、現地審査対象作品を選定する書類審査に移っ た。応募資料の内容を丁寧にトレースし、議論を重ねた末に、現地審査該当作品（応募順）として以下の 6 作品、①フツウ・ノイエ（赤坂真一郎君／㈱アカサカ シンイチロウアトリエ）、③第一三共札幌支店ビル（今井宏君／清水建設㈱設計本部）、⑧札幌市立大学大学院デザイン研究科棟（那須聖君／札幌市立大学、辻 弘明君他／創建社）、⑨下川町環境共生モデル住宅　美桑（櫻井百子君他／アトリエ momo）、⑩岩見沢の家（長坂大君／京都工芸繊維大学）、⑪Leaf house（小倉寛征君／エスエーデザインオフィス）が選定された。

現地審査は、委員 7 名の過半の参加を原則に 3 回に分けて実施された。6 月 28 日に③第一三共札幌支店ビル、⑧札幌市立大学大学院デザイン研究科棟、7 月 4 日に①フツウ・ノイエ、⑪Leaf house、⑩岩見沢の家、7 月 30 日に⑨下川町環境共生モデル住宅　美桑の審査を周辺環境から建築空間の内外まで詳細な観察と、設計者やクライアントか らの説明や質疑などを行った。

最終審査会は、9 月 1 日、札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。選考審査は、各委員が各作品に対する見解を述べたのち、候補作 品全体について議論、さらには、個々の作品の評価と意義が整理され、長い討議になった。評価の指標は前述の 3 つの視点からであったが、その 3 つをすべて満 たすような作品については該当する作品を見いだすことはできず、本年度の北海道建築賞は該当無しという結論になった。その後、建築奨励賞の選考に入り、6 作品よりまず、⑧札幌市立大学大学院デザイン研究科棟と⑪Leaf house が選考対象から外れ、4 作品に絞られた。その上で、各作品に対して評価と意義が整理され、最終的に委員全員の投票によって、「フツウ・ノイエ」 と「岩見沢の家」を本年度の北海道建築奨励賞とした。

「フツウ・ノイエ」は、敷地が持つ自然環境を繊細な感性で捉え、その特徴を素直に建築に取り込むという非常にオーソドックスではあるが、現代建築が繰り 広げる様々な空間操作とはまったく別種の言わば正則的な作法が、かえってこの敷地における設計者が抱いた瑞々しい住宅空間を成立させた作品として評価でき る。

「岩見沢の家」は、施主と建築家の住宅に対する意思を素直に表現した作品で、住宅の内部を明快な躯体と地形のような床の構成で内部というよりむしろ外部的感性で構成するという設計者の意図を単純な手法でしかも明確に力強く表した作品である。

今回建築奨励賞になったこの 2 作品から見えてくることは、住宅という建築作品に欠かせないのは、東日本震災後のエネルギー需給の問題からもクローズアッ プされているような、住宅におけるエネルギーなどの環境性能の数値的な追求や、ややもするとか細い美しさだけが表出

するにすぎない空間操作だけではなく、 地域の環境とどのように向き合い、その土地でどのような生活をするのか、そのためにどのような住宅をつくるのかという、建築を生み出す根源的とも言える行 為の中にある強い意志とその充実度である。このような営みが住宅を小規模ではあるが、社会的に意味を持つ建築作品に昇華させる可能性を持つ所以であろう。 その局面に改めて今回の選考で光を当てることができたのではないかと考えている。

現地審査 6 作品のうち、4 作品は残念な結果となったが、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

●第一三共札幌支店ビル：札幌の大通り公園沿いの北向きに立地する製薬会社のオフィスである。北側というエネルギー条件としては不利ではあるが、都市景観 としてはこの上ない魅力を持つ外部の風景に対して、熱的に充分考慮されたガラスカーテンウォールを使って、気持ちよい執務空間を成立させている。その他の 技術もバランスのよいエンジニアリングと言えるが、使える技術のアセンブルを行っただけになっている部分も散見され、自社ビルという条件設定にしては、よ り先進的な挑戦ができたところがあったのではないかということが悔やまれる。

●札幌市立大学大学院デザイン研究科棟：基本計画の段階で考えられた配置計画は、清家清氏のマスタープランの中にどのように新しい建物を配置するかという ことに対する腐心の後が感じられ、群として構成も設計者の意図がよく表現されている。しかし、その後の実施設計、施工の段階で、基本計画で決定した建築構 成のルールを構造、設備とどのように調整し、調和させていくのかという部分に無理が生じているところがあり、結果的に建築としての整理ができていない部分 が残念である。

●下川町環境共モデル住宅　美桑：地元の技術や材料を使い、環境共生住宅のモデルを創ろうとする取組は、事業としてまた、設計者の姿勢としては、意欲的で 大変評価のできるものである。しかし、建築として見た場合、全体的な組み立てにおいては、たとえモデル住宅であっても技術を取捨選択し、この計画にふさわ しい空間を獲得するという設計者の姿勢が必要だったのではないだろうか。特に 1F の平面計画において、住宅としての空間の意味や必然性に疑問が残る。

●Leaf house：中央にコアを置き、周囲に回廊上の動線とその動線上に閉じる空間と開く空間を配置するという特徴的な平面計画を取った意欲的な住宅である。4 方向に意図的に制限された開口部から見える風景によって、外部との関係性がつくられている。しかし、かえって出来上がった空間は、この設計の意図によって 閉鎖的になってしまい、外との関係が希薄になってしまっているように感じられる。内部空間の環境的な質の確保は、充分達成されていると言え

るが、図式のみ からでは、美しいものをつくるという建築としての意味に到達できないのではないだろうかという疑問を抱かせた。

（文責：小篠隆生）

第 36 回　北海道建築奨励賞

赤坂　真一郎　君　「フツウ・ノイエ」の設計

藻岩山西側に刻まれた谷間に沿って開かれた住宅地。その最端部にこの住宅は静かに建つ。道路よりおよそ 1 層分下がった敷 地を見れば、これより先には谷間と深い森林の他に何もない。ここだけを取り上げれば別荘地と呼ぶほかないような環境が、札幌の中心市街地にほど近いところ に存在していることをあらためて認識する。

約 7.2×7.2m を平面とするほぼキュービックな住宅である。道路からブリッジを渡ってアプローチする 2 層部分に水回りとダイニングが、また 1 層部分 にはリビングと寝室ともなるフリーなスペースが、田の字をガイドラインとするかのように、それぞれよく整理されてつくられている。ある意味でごく"普通" のこの基本構成に対して、その一角に吹抜けとテラスが交叉しながら楔のように入り込むことで、さらに開口部もここに集約されることで、様々な豊かな表情を 内部につくり出している。例えば、木々の間を通して入り込む光の他にも、アルミ壁に反射した間接光や、障子を通した柔らかい光などが、時間とともに繊細に 輻輳する。また樹木の緑や陰影も、空間の表情に変化と緻密さを与えている。

ここでの作者の創作の意図は、明確に一点に絞られている。北海道における透明で繊細な太陽光や豊かな樹木による彩りなど、住宅の置かれた自然的環境を微 細に捉え、それらに感応することによって住宅を成立させること。それは空間構成を様々に操作することによってそこに現代的な関係性をつくり出そうとする、現代建築の主とした傾向の対極にあるともいえるだろう。このように光などの空間の性質的側面に意味を見出そうとすること自体は、また実にオーソドックスな ことでもあるのだが、あえてそのオーソドックスなことに向き合おうとしていることにこの住宅の意義があるように思われる。さらに、ここで為されている建築 的操作の数々が、どれも表現としての突出した角が取れて、さりげなくかつ柔らかい全体として、素直に心地よい空間をつくり出していることに意義があるよう に思われる。

多くの先達たちの創作によって、北海道の建築が様々なスタイルや方法論を生み出してきたことは事実である。しかし、これらの多様な表現の展開がある一方 で、実のところ北海道の建築家たちが深いところで共有財産のように蓄積してきたことのひとつは、意識的であるかどうかにかかわらず、北海道特有の環境に対 する感受性でありその方法論であったのではないだろうか。この小さな住宅が優れているのは、作者が環境に対する感覚を磨き、それを建築の方法論としても" 身体化"して設計しているからに

他ならない。それは作者個人の経験であると同時に、先達たちが築いてきたがゆえのものでもあるのだろう。ふと作者自身がそのことに気づき、それを主題とし てこの小品がつくられた。豊かな自然に囲まれたロケーションにおいて、都市住宅であると同時に別荘でもあるようなこの住宅のあり方は、北海道あるいは札幌 における"フツウ・ノイエ"にも見えてくる。タイトルは言い得て妙である。

（文責：山田深）

第 36 回　北海道建築奨励賞

長坂　大　君　「岩見沢の家」の設計

ところどころに空地も目立つ住宅地の中にあって、約 19m の長い箱形ボリュームが倉庫か何かのように、明らかに周囲とは 異なる風情で建っている。カラマツの面皮を残して粗く張られた外壁は、すでに渋めの色合いへと変化しつつあるが、周囲に溶け込むというよりは、静かに何か に対峙しているようにも見える。南側に隣接したグラウンドに向けて大きく開いたガラス面からは、種々雑多なものがこの内側に存在していることを窺い知るこ とができる。

この長いボリュームの中に、ガレージや個室を収めた 3 つの箱が間隔を空けて置かれ、それらがブリッジによって繋がれている。作者も述べているように、そ れはふたつの谷を跨ぐ地形のようである。内部は基本的に構造用合板やパイン材などで仕上げられているが、西側の長手壁面には、アンダーに染色された棚が地 形を横断するように全体を覆っている。また、スリット状の開口が視線よりも若干低い位置に水平に長い亀裂を入れることで、この地形のような空間は、箱形で ありながらも、全体として外部に近い印象をつくり出している。ワンルームのようにつながった空間であるが、ここを構成しているのは、手摺もない谷のような 地形であり、そこを横断する濃色の棚であり、長いスリットである。それは近年多く見られるような繊細かつ緩やかに分節されたワンルームとは異なり、強い要 素によって構成されているということができるだろう。

自然環境の専門家であり様々な趣味を持つ施主が、夫婦ふたりでここをフィールドのようにして住まう。膨大な書籍が棚を埋め、他にも楽器類や陶器、あるい はアウトドア用器具や動物の骨など実に様々なモノが置かれてあるが、それらは施主の活動とともにきちんとした居場所を得て存在しているように見える。施主 のこのような生活のあり方があってこその住宅であり、作者とともに施主がこの空間をつくり上げているともいえ、空間と人とモノとの幸福な関係がここで成立 している。

空間のつくり方や素材の扱いにせよ、あるいは施主のここでの生き方にせよ、実にワイルドである。生活に対する強い意志と、そのための骨太な建築。基本的 にシンプルにつくられた住宅ではあるが、それは淡泊であることとは対極にあるだろう。あらためて近年の道内建築家による作品群を思い返してみれば、多種多 様であるとはいえ、それらの多くが時代の動きに敏感に反応しつつ、主として洗練と美しさを競う傾向にあるようにも思えてくる。そのことは確実に建築の水準 を底上げしている一方で、上品ではあるが線の細い様式化へと向かうことでもあ

るのではないか。道外の建築家によるこの作品が、そのようなことを我々に気づ かせてくれるようにも思う。

（文責：山田深）